

Q 文書における「思い煩いに関する説教」の 修辭学的分析

山 田 耕 太

はじめに

筆者は Q 文書における「洗礼者ヨハネに関する説教」「宣教開始の説教」「弟子派遣の説教」⁽¹⁾の修辭学的分析を進めてきた。しかし、以上の Q 文書前半部分の説教箇所は、Q 研究者の間でも、その構成区分が比較的に一致している箇所における説教であった。⁽²⁾しかし、Q 文書の後半部分にもいくつか説教があるが、後半部分は一見すると編集作業があまり施されておらず、⁽³⁾雑然と配列されているかのように見え、研究者の間で区分は一致していない。⁽⁴⁾

「思い煩いに関する説教」は、その中で比喩として「空の鳥、野の花」が言及されることから、「空の鳥、野の花」あるいは「野の百合、空の鳥」⁽⁵⁾としてもよく知られている。しかし、ここでは Q 文書後半部の前半である第四ブロックに位置づけて、その中での「思い煩いに関する説教」はどのような構造をしているのか分析してみたい。

1. 研究史瞥見

(1) 資料研究

ハルナックは、Q 資料のオリジナル版を探求してその Q 資料の性格の一つに「説教」があることを指摘し、「洗礼者ヨハネの説教」「イエスの宣教開始説教（山上の説教・野の説教）」「弟子派遣の説教」などとともに、「思い煩いに関する説教」は Q 資料の中でも重要な 13 の説教断片からなる 10 の説教の一つとして位置づけた。⁽⁶⁾

また、T. W. マンソンは、「思い煩いに関する説教」の中で、Q12:12:24, 27-28 の「からす」と「野の花」への比喩的な表現は、詩的な「対に組み合わせられた並行法」(compound parallelism) が用いられていることを指摘した。⁽⁷⁾

(2) 様式史・編集史研究

ブルトマンは、この箇所では Q12:25 が独立した語録であるばかりでなく、Q12:22-23、Q12:24、Q12:26-28 も独立した語録であったと考え、

Q12:29-31 は二次的に付加されたものであり、全体は知恵の言葉に属すると考えた。⁽⁸⁾

これに対してシュルツは、ブルトマン同様に Q12:22-31 は二段階で構成されたと考えたが、連続して一続きの説教としてまとめられていることを指摘した。Q12:22, 28 に見られる「私はあなたがたに言う」⁽⁹⁾などは、「預言の言葉」の導入であり、また「神の国」への言及は、終末論的言辞であり、Q 文書の基調は終末論的な「預言の言葉」であることを強調した。⁽¹⁰⁾

ブルトマンを補足するかのように、ツェーラーは、Q12:22, 25 が史的イエスに遡り、Q12:22 が伝承の基礎にあり、「思い煩うな」が伝承の「繋ぎ言葉」(Stichworte)⁽¹¹⁾ となつて。Q12:22b-23, 24, 27-29 の伝承に Q12:25, 26 を繋ぎ、最後にユダヤ人キリスト教の伝承である Q12:30-31 が付加され、三段階で構成されたと考えた。また、Q12:24, 26-28 に見られるように日常の自然界の観察に基づいて勧めるのは、旧約聖書の「知恵の言葉」(例、箴言 6:6-8) の伝統であり、その上に「神の国」をテーマとする「預言の言葉」が追加されたと見做した。⁽¹²⁾

他方、パイパーは、「思い煩いに関する説教」での、「思い煩うな」(Q12:22, 25, 26, 29) というテーマに着目して、伝承が四部で構成されていることを指摘した。すなわち、第一に、「思い煩うな」というテーマの提示部 (Q12:22)、第二に、「食物」と「着物」への「思い煩い」というテーマを「命」と「体」という並行したテーマの展開部 (Q12:23)、第三に、自然の観察から得た「知恵の言葉」を用いて「自然の小さな者よりもはるかに優っている」という「小より大」の論理と修辞疑問ならびに「ソロモンの知恵」との「比較」を用いた議論の展開部 (Q12:24-28)、最後に、「食物」「着物」への「思い煩い」から「神の国を求める」ことに飛躍する結論部 (Q12:29-31) で、基本的には「知恵の言葉」の伝承に位置づけた。⁽¹³⁾

クロッペンボルグは、Q12:22b-24, 26-28 の「思い煩うな」と Q12:29-31 の「神の国を求めよ」は異なる状況で生じた伝承で、前者はイエスに派遣された弟子たちに語られた言葉であり、後者は共同体に向けて語られた言葉であることを示唆する。それに編集作業で、別の伝承である Q12:25 が加わったと考えた。また、シュルツの指摘する「私はあなたがたに言う」などの表現は「預言の言葉」に特徴的な表現に限らず、ブルトマンやツェーラーが指摘するように「知恵の言葉」が伝承の古層 (Q¹) であり、その上に「預言の言葉」の新しい層の伝承 (Q²) が加わり、最後に編集作業 (Q³) がなされたと考えた。⁽¹⁴⁾

それに対して一方でホフマンは、Q12:33-34 は、最初は Q12:22-31 の前

にあったもので、冒頭の「天に宝を蓄える譬」の Q12:33-34 に対応して「神の国を求める」ことを勧める Q12:31 が末尾に追加されたと考えた。こうして、ガリラヤの貧しい農民層を念頭に置いた原初の Q12:22-29 のメッセージは、編集段階で「神の国」に関する言葉で粹取られて、神の国を宣教する弟子たちへのメッセージに作り変えられたとした。⁽¹⁵⁾

他方でタケットは、Q12:22, 24, 26-28 の「からす」と「百合」の伝承が核心であり、それに「思い煩うな」というモチーフで Q12:23 と Q12:25 の多少異なった伝承が後から加わり、最後に Q12:30-31 の「食物や着物を求める異邦人」と「神の国を求める信者」の伝承が加わったと考えた。その上、「思い煩い」はキャッチボールが指摘したように⁽¹⁶⁾「神の国の遅れ」による終末論的な背景によるもので、「知恵の言葉」によるものではなく、むしろ「神の国」を祈り求める「主の祈り」(Q11:2-4) や「執拗に祈り求めること」(Q11:9-13) と連続性があることを指摘した。⁽¹⁷⁾

以上のように、資料批評の研究に基づいた伝承史的方法での分析では、「思い煩いに関する説教」が一様ではなく、それが二段階であるか、三段階であるかにかかわらず、いくつもの伝承の断片が折り重なって一つの伝承にまとまったとする。そして、その古層が「預言の言葉」か「知恵の言葉」かが論争されてきたが、20 世紀の前半から中盤では、「預言の言葉」の議論が強かったが、20 世紀の後半から「知恵の言葉」の立場が強くなってきた。また、ヨーロッパの研究者は「預言の言葉」の影響が強く、北アメリカの研究者は「知恵の言葉」の影響が強く見られる傾向がある。

しかし、Q 文書では「預言の言葉」の要素が「知恵の言葉」の要素が混じりあっているのが現実で、どちらが古層かと一刀両断に割り切ることができない。伝承史的方法は、伝承の形成の由来を明らかにしようとする点に関心があり、その断片そのものがどのように構成されているかについては、ほとんど関心がなく、説教の構造分析や構成について分析するには限界がある。

(3) 修辞学的研究

修辞学的研究はまだ多くはなく現時点では三例しかない。第一に、デイロンは Q12:22-31 の構造を修辞学的視点で次のように分析した。⁽¹⁸⁾

12:22：命題「思い煩うな」

12:23-24：第一議論

23：大から小へ「命は食べ物より、体は着物より大切ではな

いか」

24：小から大へ「あなたがたは鳥よりも大切ではないか」

12:25-28：第二議論

25-26：大から小へ「思い煩って命を延ばすことができようか」

27-28：小から大へ「神はあなたがたによりよくしてくださらないか」

12:29-31：結論

ディオンの分析では「小から大」の類比を正しく指摘しているが、その直前の「カラス」と「野の花」という具体的な「範例」が抜け落ちている。また「思い煩うな」というテーマ（命題）が何度も繰り返されたり、変形して展開されたりしていることが分析されていない。

第二に、カークは Q12:22-31 の構造を修辞学視点で以下のように分析した。

12:22：全体テーマの勧告

12:23：その動機と理由

12:24：範例

12:25：中央の格言

12:26-28：範例

12:29：結びの勧告

12:30：その動機

12:31：勧告と約束

カークによれば、「勧告」と「範例」を繰り返して用いる説教は、「イエスの宣教開始説教」(Q6:27-35, 37-42)にも、「祈りと勧め」(Q11:2-13)、「ベルゼブル論争」(Q11:14-23)、「霊のしるし」(Q11:29-35)にも見られるが、Q12:30-31 は他には見られないという。

また、「格言」と「勧告」の交差、「修辞疑問」や「小から大へ」の類比などは、聖書内外の「知恵の言葉」の特徴であると指摘した。⁽¹⁹⁾

第三に、フレッターマンは「思い煩いに関する説教」の構造を以下のように分析した。

A 12:22-23：導入のテーマのアピール

B 12:24：範例 1（カラス）

C 12:25-26：テーマの展開

B' 12:27-28：範例 2（百合）

A' 12:29-31：結びのテーマのアピール

テーマのアピールと展開で、「思い煩い」というキー・ワードが繰り返

され (Q12:22、25、26、29)、二つの範例は似たような構造をもち、その中で「小から大へ」の類比 (Q12:24、28) を用い、全体でも「修辞疑問」 (Q12:23、24、25、26、28、29) を多用し、「命」「体」「食べ物」「着物」などのキー・ワードが繰り返されて、前のペリコーペとの繋がりを強めて全体を一つにまとめていることを指摘した。

以上のフッレダーマンの分析は、「思い煩いに関する説教」の修辞学的構造と文彩を多少なりとも解明してはいるが、修辞学概念と用語を用いて徹底的に分析しているとは言えない。

2. Q 文書第四ブロックのマクロ構造

「思い煩いに関する説教」が置かれた、Q 文書の第四ブロックは以下のような構造をしている。

A : 告白と聖霊の助けについて (Q12:2-9、Q12:10-12)

B : 思い煩いに関する説教 (Q12:22-31)

B' : 地の国についての譬え (Q12:33-34、Q12:39-40、Q12:42-46)

C : 分裂と和解について (Q12:49-53、Q12:54-56、Q12:58-59)

B" : 神の国についての譬え (Q13:18-20、Q13:23-27、Q13:28-29、Q13:30)

A' : エルサレムに対する非難の言葉 (Q13:34-35)

序論である導入の「告白と聖霊の助けの教え (格言)」と結論である結びの「エルサレムに対する嘆きの言葉」の間に、本論の「思い煩いに関する説教」で地上の物に対する思い煩いと神の国に対する思い煩いからの解放を述べ、「地の国についての譬え」と「神の国についての譬え」の中間に、両者の間での「分裂と和解について (格言)」が語られる。全体としては「キアスム的シンメトリー構造」(ABCBA) を保っている。

以下では「思い煩いに関する説教」についての修辞学的分析を進めていく。

3. 「思い煩いに関する説教」のミクロ構造

(1) 「序論」(exordium) と「命題」(propositio): 「思い煩うな」(12:22 a, bc)

「私はあなたがたに言う」という導入句は、「預言の言葉」であるか否かが論じられてきたが、しばしば預言者の特徴的な表現として用いられてきたばかりでなく、それ以外の言葉にも見られることは既に指摘されたと

おりである。それはQ文書にも見られる。Q文書では、主として議論の結論に用いられるが(Q7:9、26、28、10:12、11:51、[12:44]、13:35、15:7、17:34)、この場合のように議論の始めに導入句として用いられることもある(Q11:9)。その意味では、「洗礼者ヨハネの説教」の導入句(Q3:7)、「イエスの宣教開始説教」の導入句(Q6:20)、「弟子派遣の説教」の導入句(Q10:2)と同じ役割を果たすものである。

ここでは導入句以外に具体的な「序論」はなく、いきなり議論の主題を提示する「命題」に入る。「思い煩うな」(μὴ μεριμνᾶτε)⁽²⁰⁾という倫理的「命題」を導入するが、「思い煩い」という「一般論」(命題、thesis)を「命」と「体」に「対置」した二つの「具体論」(仮説、hypothesis)に分け、「命のことで何を食べようか」「体のことで何を着ようか」と二つの「間接疑問」を「並置」して印象付ける。

(2) 「論証」(argumentatio) : 「命と体の方が大切である」(12:23)

日常的に「思い煩い」の対象となっている「食べ物」と「着物」から本質的な事柄である「命」と「体」の問題に目を転じさせる。その際に、「命は食べ物よりも大切であり(ではないか)、体は着物よりも大切ではないか」と「並置」された格言的表現を「修辞疑問」を用いて、聴衆や読者に対して説得的に議論を導く。

(3) 「例証」(exemplum) : 「カラスについて」(12:24)

さらに「カラスのことをよく考えてみなさい」(24a)と自然界に目を転じさせ、大自然の中で最も小さな存在で人間に忌み嫌われがちな「カラス」⁽²¹⁾を例に挙げる。「種もまかず、刈り取りもせず、倉に集めもしない」(24bc)と三つの動詞で連ねる「トリコーロン」を用いて、農夫の労働と「比較」し、大自然の恵みの中で「神はそれらを養ってくださる」(24d)ことを指摘する。そして「あなたがたは鳥たちよりもはるかに優っているではないか」(24e)と「小から大へ」の類比を「修辞疑問」を用いて、人間に対する神の配慮を説得的に「例証」する。

(4) 「反論」(refutatio) : 「思い煩っても命を延ばすことができない」(12:25)

「思い煩うな」というテーマを展開していく。「思い煩う」ことに対して「誰が…自分の寿命に一日を加えることができようか」と日常の論理の「思い煩うと寿命が縮む」とは「逆説」(アイロニー)した格言を用いて、

「修辞疑問」形で「反論」する。

(5) 「命題」(propositio) : 「着物で思い煩うな」(12:26)

「思い煩うな」という「命題」を繰り返して「重複」する。「具体論」(仮説)の前半の「命」については既に述べたので、後半の「体」について「着物についてなぜ思い煩うのか」と「修辞疑問」を繰り返す。

(6) 「例証」(exemplum) : 「野の花について」(12:27-28)

次に大自然の中で「空の鳥」ではなく、「野の花」⁽²²⁾に目を向けさせる(27a)。「働きもせず、紡ぎもしない」(27b)と動詞を二つ重ねて、農夫の妻の労働と「比較」する。

続いて、「あなたがたに言う」という導入句を再び繰り返して「重複」し(27c)、第一に、神の「栄光」を反映した野の花の美しさを最も繁栄した時代の「ソロモンの栄華」を「比較」して、それに優っていることを指摘する(27de)。

第二に、「今日は野にあって」(28a)美しく咲き、「明日は炉に投げ入れられる」(28b)はかない存在である「野の草でさえ」神は配慮して下さるのと「比較」して、「あなたがたははるかに優れているではないか」(28d)と二重の「比較」の上に「小より大へ」の類比と「修辞疑問」を再び用いて、人間に対する神の配慮を説得的に「例証」する。

(7) 「結論」(peroratio) : 「思い煩わずに、神の国を求めよ」(12:29-31)

第一に、以上の議論をまとめて「何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようか」(28b)と「直接疑問」を三つ重ねる「トリコーロン」を用いて「思い煩うな」という主題をもう一度繰り返して想起させる。

第二に、「これらのものを異邦人たちが切に求める」に「対置」して「あなたがたは神の国を探し求めよ」と「思い煩い」から解放されて、「神の国」を求めることを勧める。⁽²³⁾

結びに

以上の議論を要約して、説教の構造と議論の要点を示すと次のようになる。

- (1) 「序論」(exordium) 「命題」(propositio) : 「思い煩うな」(12:22a,bc) A
- (2) 「論証」(argumentatio) : 「命と体の方が大切である」(12:23) B

- (3) 「例証」(exemplum) : 「カラスについて」(12:24) C
 (4) 「反論」(refutatio) : 「命を延ばすことができない」(12:25) D
 (5) 「命題」(propositio) : 「着物で思い煩うな」(12:26) A'
 (6) 「例証」(exemplum) : 「野の花について」(12:27-28) C'
 (7) 「結論」(peroratio) : 「思い煩わずに、神の国を求めよ」(12:29-31) A''

(1) 説教全体はバラバラな部分が次第に寄せ集められていって構成された集合ではなく、最初から一つにまとまった説教であり、修辞学的に巧みに構成された統一体である。

(2) 導入句を別にすると、説教の根幹は、「思い煩うな」という「命題」(A、A')と「カラスのことをよく考えてみなさい」「花がどのように育つかよく見てみなさい」で導入される「例証」(C、C')を繰り返して構成される。

(3) 説教全体は、「序論・命題」と「結論」で「包摂」する構造で(A、A'')、基本的には「キアスムのシンメトリー構造」(ACA'C'A'')をしている。

(4) それに対して、第一の「例証」(C)の前後に、「論証」(B)と「反論」(D)の肯定と否定の相反する議論を加えて「包摂」し、説得性を高めている。また、第一の「例証」の中で、大自然の中で小さな存在である「カラス」とそれより大きな存在である人間とを「比較」して「小から大へ」の類比を用い、大自然の中での人間に対する神の配慮を説得的に述べる。

(5) それとは対照的に、第二の「例証」では、「ソロモンの栄華」と「野の花」の「比較」の上に「野の草」と人間を二重に「比較」し、「小から大へ」の類比を用いて、鮮やかに印象づける。

(6) 既に「修辞疑問」(23b、24e、25b、26、28d)と「小から大へ」(24e、28d)の類比が用いられていることが、さまざまな研究で指摘されてきた。しかし、説得的に議論を展開し、論点を明確にして、議論を印象づけるために、その他にも「一般論(命題)」と「具体論(仮説)」、「並置」と「対置」、テーマや導入句の「重複」、「比較」「逆説(アイロニー)」「格言」、「修辞疑問」ばかりでなく「間接疑問」(22bc)と「直接疑問」(29b)などの修辞学的概念や文彩が用いられている。

(1) 「Q文書における洗礼者ヨハネに関する説教の修辞学的分析」、廣石望・編『周辺世界における聖書宗教：月本昭男教授、佐藤研教授献呈論文集』日本聖書学研究所／リトン社、2014年、379-398頁；「Q文書における宣教開始説教の修辞学的分析」『敬

和学園大学研究紀要』第24号(2015年)、1-19頁；「Q文書における弟子派遣の説教の修辞学的分析」『敬和学園大学研究紀要』第25号(2016年)、1-15頁＝“Rhetorical Analysis of the Mission Charge in Q,” *Annual of the Japanese Biblical Institute*, vol. 40 (2014), pp. 65-84.

本稿はこれらに続くもので、初出の論文・書籍以外は略号で出典を記す。

- (2) Q文書の前半部の構成は「洗礼者ヨハネとイエス」(Q3:2-7:35)、「イエスと弟子たち」(Q9:57-11:13)、「イエスと反対者(この世)」(Q11:14-51)と三部に区分とする点では、最近の研究ではほぼ一致している(e.g. P. Hoffmann & C. Heil, *Die Spruchquelle Q: Studienausgabe Griechisch und Deutsch*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft / Leuven: Peeters, 2005; 32-61; Fleddermann, *Q*, 105-110, cf. Manson, *Sayings of Jesus*, 39-114, “John & Jesus”, “Jesus & His Disciples”, and “Jesus & His Opponents”)。ただし、次のものは第二、第三区分をQ11:13/Q11:14ではなくQ10:22/Q10:23で区切る、cf. Jacobson, *The First Gospel*, 77-183; Kirk, *Composition*, 309-403.
- (3) Sato, *Prophetie*, 16-65.
- (4) Jacobson (*The First Gospel*, 184-250) と Kirk (*Composition*, 289-308) は、Q12:2-22:30を区分せずに(cf. Manson, *The Sayings of Jesus*, 114-147, “Future”)、前者は全体を「共同体のために」とし後者は「終末の教説」というタイトルで多様な内容を一括りする。それに対して、Fleddermann は (*Q*, 115-119)、Q13:21/Q13:24 で区切って前半を「現在の神の国」、後半を「将来の神の国」と二つに分けるが、必ずしも「現在」と「将来」にきっちり分けられるものではない。Hoffmann と Heil は (*Q*, 75-113)、「人の子を待つ弟子たち」(Q12:2-13:21)、「イスラエルの危機」(Q13:24-14:23)、「イエスに従う弟子たち」(Q14:26-17:21)、「終末」(17:23-22:30)を内容で分けているが、前半と比べてアンバランスなほどに細分化している。
- しかしここでは、内容とキー・ワードによるテーマの議論と論理の展開から「真の共同体のために」(Q12:2-13:35)と「弟子の生活」(Q14:11-22:30)の二つに分ける。
- (5) 例えば、キルケゴールの哲学的省察「野の百合、空の鳥」『キルケゴール著作集』第18巻、白水社、1995年、参照。
- (6) Harnack, *The Sayings of Jesus*, 4-8, 165. しかし、それはさらに「洗礼者ヨハネの説教」「イエスの宣教開始説教(大説教)」「弟子派遣の説教と祈り」「ファリサイ派批判の説教」「終末の説教」の五説教にまとめられる。
- (7) Manson, *Sayings of Jesus*, 110-113.
- (8) Bultmann, *Tradition*, 81, 88 (= *Geschichte*, 84, 92).
- (9) Sato, *Prophetie*, 226-247.
- (10) Schulz, *Q*, 149-157.
- (11) H. Schürmann, “Das Zeugnis der Redenquelle für die Basileia-Verkündigung Jesu,” *Logia*, 121-200. そこではQ12:29-31が「根源語」(Grundworte)であり、そこからQ12:22-28が二次的に派生したと考えられていたことに対して。
- (12) Zeller, *Mahnsprüche*, 82-93.
- (13) Piper, *Wisdom*, 24-36.
- (14) Kloppenborg, *Formation*, 216-221; idem, *Excavating*, 140-143, 154-163.
- (15) P. Hoffmann, “Die Sprüche vom Sorgen in der vorsynoptischen Überlieferung,” H. Hierdeis & H. S. Rosenbusch (eds.) *Artikulation der Wirklichkeit: Festschrift für S. Oppolzer zum 60. Geburtstag*, Frankfurt: Lang, 1989, 73-94 = *Tradition*, 88-106.

- (16) Catchpole, *Quest*, 1993, 31-39.
- (17) Tuckett, *Q and History*, 149-155.
- (18) R. J. Dillon, "Ravens, Lilies, and the Kingdom of God (Matthew6:25-33/ Luke 12:22-31), " *CBO* 53 (1991) , 605-627.
- (19) Kirk, *Composition*, 215-227.
- (20) 「思い煩いに関する説教」の一つ前のペリコーベでは、会堂に連れて行かれた時に「何をどう言おうかと思ひ煩わないように」(Q12:11)と述べ、「思い煩うな」という説教の主題(命題)は、前のペリコーベとの連続性を示している。
- (21) マタイ版「空の鳥」ではなくルカ版「カラス」がオリジナルである点は、ハルナックの資料批評以来、一致している。「思い煩いに関する説教」の二つ前のペリコーベでは、小さな存在として「雀」が例に挙げられている(Q12:6)
- (22) 最近の解釈では「百合」に限定しないで「野の花」と訳す。野の草花のなかで、小さな存在であり、「ソロモンの栄華」と比較され、王の衣装の紫色ないしは緋色の花で(士師記 8:26、マルコ 15:17、マタイ 27:28、ヨハネ 19:2)、枯れて焼き付けなどの炉にくべられるパレスティナの花としては、百合よりはアネモネ、グラジオラス、ショウブ、アザミなどが考えられる。人が忌み嫌う「カラス」に対応するのは「アザミ」(創世記 3:18)かも知れない。
- (23) このテーマは Q13:18-21、24-27、28-29、30 で展開される。